

子どものSOS 見落とさない

凶悪事件の背景 専門家が語る

佐世保、名古屋、川崎一。未成年が関与したとみられる殺人事件が続く。調べに対し、少年らが「人を殺してみたかった」などと供述するような凶悪事件は、なぜ繰り返し起きるのか。教育行政学が専門で、神戸大名誉教授の広木克行さん(70)は山梨市内で行った講演で、子どもが発するSOSに周囲が気付かず、受け止められていない社会の状況に原因があると指摘。「議論を責任追及にとどめず、子どもたちが抱える苦しみの本質に向き合ってほしい」と訴えた。(木下澄香)



「また繰り返してしまっ
た、と正直に思いました」。
昨年7月、長崎県佐世保市
で起きた高校1年の少女が
同級生を殺したとされる事
件。同市では2004年に
も小学6年の女兒が同級生
を殺害する事件があり、広
木さんは直後から長崎県内
で住民と議論を重ね、教育
委員会に対し「専門家を
集めた第三者委員会でも分
析してほしい」と申し入れ
たが「必要ない」とあっぱ
なく断られたという。

「言っても無駄」

昨年の佐世保市の事件か
ら約半年後、名古屋大の女
子学生が70代女性を殺害し

山梨市で演 苦しみの本質、受容が大切

た容疑で逮捕された。2月
に起きた川崎市の中1男子
生徒の殺人事件では、17
歳の少年3人が逮捕、家
裁送致された。「なぜこん
なにも命が軽んじられるの
か。それは、事件後の議論
が責任追及にとどまり、教
訓を引き出すということが
一貫して行われてこなかっ
たからです」と広木さんは
話し、教訓として「子ども
が発するSOSの見落と
し」を挙げた。

競争がおおる不安

子どもは悩みを打ち明け
るとき、「相談があるんで
す」と言っただけで「食
事をしているときなどリラ
ックした状態で、信頼で
きる大人に、異変を感じさ
せる一言を放つ。だが、親
や教師にゆとりがなければ
、「頑張れ」などという
正論でつぶしてしまい、子
どもは「言っても無駄だ」
という絶望を味わう。そし
て、言葉で伝わらないSOS
を自分や他者を傷つける
ことで示すようになるとい
う。

「子どもの心に関心を持
ち、しっかりと受け止めるこ
とで子どもは『自分は理解
してもらっている』と感じ
ることが出来る。子どもた
ちの苦しみは、何が事件に
も、自傷行為にもつながる
というところを理解し、大人
が関わり方を工夫してい
くことが大切です」

講演は、山梨県高教組な
どが開いた「教育のつどい
YAMANASHI 2015」の中
で行われた。県内の
高校教員のほか、地域住
民ら約80人が聴講した。

「責任追及だけで問題が解決するなどとい
うことはあり得ない。子どもの苦しみを
受け止めることが大切」と話した広木
克行さん

山梨市民会館